

これからの自動分析装置に求めること

東芝メディカルシステムズ(株)検体検査システム事業部 河端俊彦

■現在の検査部門の環境

➤ 2006年診療報酬改定とその後

2006年診療報酬改定は、医療版改革の総仕上げとしてマイナス3.16%(診療報酬マイナス△1.36%、薬価等マイナス1.8%)が実施された。

2006年から2008年に予期される政府施策として、第5次医療法改正(病床規制の見直し・新高齢者医療保険制度導入等が検討されている)が予想される。

➤ 検査部門の抱える関心事・問題点

現在、検査部門はどのような関心、問題を抱えているのか?最近のアンケート調査によると60~70%の施設が、検査機器コスト、試薬コストを含む収支管理に最大の関心があるとの結果が得られている。

➤ 病院が求める検査部門

医療制度の変革、リアルタイム診療、患者 QOL の向上のために院内検査部門に対する要望・重要性は高く、求められる内容は次の3点に集約される。

- ① 臨床的に高品質なデータ保証
- ② タイムリーな結果報告(24時間対応含む)
- ③ 合理性・収益性を改善し人員の有効活用

■検査部門の方向性

依然として、病院での検査部門へのニーズは高く、この機を捉え検査部門の収支・分野・運用の再検討を行えば、「顧客ニーズに即応した病院にとって魅力的な検査部門」として、病院へ提案する絶好の機会となりうる。

➤ 現在の検査部門の収支計算をする。

収支(収入、経費、利益)は、あらゆる改善の基礎データであり、解析結果より、顧客ニーズに即応、そして経済効率の高い運用、業務フロー、人員配置、機器配置、投資の「青写真」が描ける。

➤ 検査部門プロセス・フロー解析する。

運用プロセス・フロー解析により、運用形態、効率的・経済的運用の改善、人員の有効配置、重点業務、重点投資等“病院にとって魅力的な検査部門”再構築施策に役立つ。

➤ 3つの“Integration” の提案

- 1 分析装置のIntegration
- 2 検査分野のIntegration
- 3 検査運用のIntegration

■分析装置の Integration

分析装置機器メーカーとして分析装置の将来は、生化学・血液・凝固線溶・尿などの全ての項目を搭載できる分析装置を開発・統合化するのが“夢”であり、統合された分析装置の開発が行われている。その一例として、血液検査分析装置では網状赤血球・CRP測定も組み込まれ、尿定性・沈査測定装置の統合機も市場に登場している。

統合機の登場は、搬送システム・前処理自動化といった大規模投資から、機器の集約化・ワークセル化と検査業務・フローの見直しにて、収益率と効率的運用の向上を目指している、現在の検査室要望に合致すると考えられる。

東芝メディカルシステムズは、生化学、免疫分野の効率的運用支援として、積年の課題であった検体間キャリアオーバーを克服し、生化学、免疫迅速結果報告に対応可能な“cシリーズ”を提供する目的で開発をした。

■Integration 化した自動分析装置の特長

- ① インテリジェントラックサンプラー
- ② 検体間キャリアオーバーの低減
- ③ 最終反応液量低減
- ④ 早打ち機能とサンプル詰まり検知機能

以上